



社殿向かって右側の神輿蔵前に並ぶ玉垣。尾道の石材工など、各地の寄進者の名前が刻まれている。



各地の商人などの名前が刻まれた玉垣。第三鳥居の両脇に並ぶ。



手洗鉢。昭和8年に木村圓吉が奉納。



社務所前の灯籠付近に並ぶ玉垣。大阪、兵庫など各地の商人たちの名前が刻まれている。



明治28年7月、徳島県出身の中谷宇吉が鳴門産の石で建立。



社殿近くの石階段。遠藤又兵衛が奉納。



昭和48年11月に板谷宮吉が寄進した灯籠。



手洗鉢。「江州荒神山麓 清水村産ヲタルナイ支配人 利左衛門」「船乗 善之助」らの名前がある。風化が激しく文字は判読できない。



松川嘉太郎の像。昭和48年6月、建立。松川は明治23年、福井県三国生まれ。中央バスの社長等を歴任。



すみよし じん じゃ
住吉神社

船乗りや豪商たちの寄進物が集まる小樽総鎮守

住吉神社は小樽の総鎮守として親しまれており、境内には創建時から現在まで様々な寄進物が奉納され、小樽の歴史を凝縮した神社である。北前船主が寄進した第一鳥居をはじめ、船乗りや豪商の寄進物が集まっていることから、平成30(2018)年に北前船日本遺産の構成文化財に指定された。

そのルーツは、元治元(1864)年6月、箱館八幡宮神主の菊池重賢が、ヲタルナイ、タカシマ両場所の総鎮守として住吉大神の勧請を出願し、慶応元(1865)年6月、ヲタルナイ運上屋の近くに奉祀を許可されたことにある。

同2年、小樽に入港する船に課税して立岩付近を埋立て、神殿を造営する予定だったが中止となり、山ノ上町の弁天社(厳島社)に仮奉祀された。後の魁陽亭の場所である。明治元(1868)年8月3日、ご神体が箱館から小樽へ到着し、御鎮座祭が行われた。

同4年、山ノ上町から量徳町28番地(現在の二葉高校付近)に移転し、同5年には信香町の海閑所脇にあった恵美須神が合祀された。祭神は、住吉神、厳島神、琴平神、恵美須神、稲荷神と、小樽のまちに関わりが深い海上安全と商業の守り神であることが特徴である。同14年の大火後、現在地に移転した。

創建以来、墨江神社と称していたが、同25年1月、氏子総代の岡田八十次、山田吉兵衛、宮司の星野十九七らが出願し、住吉神社に改称した。同31年6月には境内地

の増加と社殿の改築許可を得て、翌32年に造営された。

第一鳥居は、瀬越(石川県加賀市)出身の北前船主・広海二三郎と大家七平が寄進したもので、明治30年1月に建立された。鳥居の石材は広島県尾道産で、北前船で小樽まで運ばれたと伝わる。

第一鳥居と第二鳥居の間にある狛犬の一つは、隠岐国西郷港(現・島根県隠岐郡)の高梨文三郎、「手船々長」の村田定市らの寄進物である。明治初年から20年代、金比羅丸ほか2隻の帆船を所有し、日本海・瀬戸内海を航海した。村田は大島屋と称しており、金比羅丸の船頭だった。

社殿下の参道脇にある古い手洗鉢は「江州荒神山麓 清水村産」(現在の滋賀県)で「ヲタルナイ支配人 利左衛門」「船乗 善之助」らの名前がある。旧地名「ヲタルナイ」が記載されている貴重な奉納物である。当初、山ノ上弁天社へ寄進され、その後、住吉神社に合祀された。

野口吉次郎、名取高三郎の鳥居、山本久右衛門、板谷宮吉らの灯籠など、豪商たちの寄進物が至るところにあり、小樽発展の歴史をいまに伝えている。

撮影：相澤詠里(小樽商科大学本気プロ)
日本遺産による小樽の活性化チーム
文章：高野宏康(小樽商科大学学術研究員)

注：大家七平(四代目)は、福井県浜坂の農家の子であったが、広海家の養子を経て大家家に迎えられた。広海二三郎とは血はつながっていない兄弟にあたる。昭和4年1月29日、同日に死去した。